若き志士たち

佃　実夫

若き志士たち

佃 実夫

毎日新聞社

若き志士たち

定価五八〇円

昭和四十五年六月十日印刷
昭和四十五年六月二十日発行

著者　佃　実夫

発行者　星野慶栄

発行所　毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ッ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒802　北九州市小倉区紺屋町
〒460　名古屋市中村区堀内町

印刷　図書印刷　製本　大口製本

© 佃実夫　1970　0093－648100－7904

目次

丸山　七
お慶　二七
出島　三七
阿蘭陀正月　四四
眉山は緑　五四
青年たち　七七
江戸の春　八六
対決　一〇〇
黒船前夜　一二三
ペリー来航　一四四
阿部正弘　一五七

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

ちぎりあれば　一八五
才人諭吉　二一〇
桂小五郎　二三三
京の春秋　二四五
マカオ　二六六
うた女抄　二七八
而立の年　三〇〇
ドクトル・ヘボン　三一三
横浜土産　三二九
京洛の嵐　三四三
やがて明治に　三六三

装幀　大歳克衛

若き志士たち

丸　山

女の悲鳴がきこえた。
「何だろう」
井上兵馬が足をとめた。
足を速めていた沼田虎三郎は、ちょっと兵馬を振り返ったが、そのまま行きすぎようとした。
夕やみのなかから、もう一度、金切り声が響いてきた。
こんどは、虎三郎も足をとめた。
「行ってみよう」
いきなり兵馬は駆け出した。
虎三郎もつづいた。
二度にわたる絶叫を耳にした二人は、若い女が襲われている……とおもったのだ。
徳島の城下から長崎まで、何ごともなく旅をして来たかれらには、長旅らしい変化や刺戟を求める気持ちがあった。ごまのはいにも、山賊にもあわず、かといって、美女と道づれになるといったふうないろどりもなく、せいぜい、宿の女中をからかったていどの平凡な旅だった。かれらはすでに、立山の丘の上にある長崎奉行所へ着到を届け、先輩留学生高畠五郎のいる宿所、光永寺へ足をむけていた。
悲鳴のきこえたところまで、およそ一丁くらいあった。
何者の屋敷なのか、広い庭の、長い板塀の外で、男女がもみ合っていた。かたわらで、みすぼらしい着物を着た五、六歳の幼女が泣きじゃくっている。
「どうした」
と、声をかけて、飛びこんでいこうとして兵馬は、野袴をたくし上げていた手を離して立ちどまった。
悪党が、かよわい婦女子をいじめているのではない。逆だ。やられているのは男だった。旅姿の、遊び人ふうの小男を若い女が打擲（ちょうちゃく）している。男は精悍な感じで、腕っぷしも強そうだのに、無抵抗だ。なぐられるままにしている。
いきごんでいた兵馬は、がっかりした。
「なーんだ。夫婦喧嘩か……。犬も食わない、というやつだな」
虎三郎も、あきれた、といったふうにいって笑い出した。
「いや、夫婦喧嘩ではないらしい」
低い声で兵馬はいい、虎三郎の大声を手で制しながら、争う男女の声をきこうと、すこし近寄った。
わめきながら、男を殴っていた女は、突然、手をおろ

し、
「親方しゃん、すいません。つい、かっとしてしもて……」
とわび、両手で顔をおおって泣き始めた。
「ええ、ええ、お慶さんの気が済めば、それでええわい。どうだい、うたちゃんは、この植久が育てようじゃないか。もっとも、渡世人のわいには、子育てなんぞはでけんよって、紺屋町の妹の、お粂にあずけるわ。あいつなら、ちゃんとした、かたぎに育ててくれるやろう」
「でも、そいじゃ、あんまり身勝手すぎるごたる……」
「いいってことよ。お前しゃんだって、小さな妹をかかえていちゃ、身うごきならんやろう」
女はうなずき、顔をあげた。その顔を見て兵馬は、思わず息をのんだ。うりざね顔の、すごい美人であった。
そばにいる兵馬たちに見むきもしないで、男女は、まだ泣きじゃくっている幼女の手をひいて立ち去った。
「つまらんことに時間を食ったな、行こう」
呆然と、女を見送っている兵馬を虎三郎がうながした。
足もとに夕やみが迫っている。
灯火のまばゆい、繁華なまちを通りぬけると、さびしい屋敷町がつづいていた。教えられたとおり、小路を曲がる。
人どおりが、絶えた。
道は、一段と狭くなり、くらい。
風が枯れ葉をまき、足もとを駆けぬけて行く。
沼田虎三郎は、目を空へやった。
雨雲が、みるまにひろがり、天が低い。
ポッン、と雨がきた。
虎三郎とならんで、足を急がせていた井上兵馬は、手のひらを上にむけ、それを確かめるふうにした。
「いかん、雨じゃ。走ろう」
虎三郎をうながして、肩の、ふりわけ荷物を胸へいだきなおした兵馬は、小腰をかがめ、すこし前のめりの姿勢で、荷物をかばって駆け出した。
武張った広い背が、まるまっている。
「おお」
答えて、虎三郎もつづいた。
一丁も行かぬうちに、パラパラッときた。
驟雨のなかを二人は、光永寺の玄関へころがりこんだ。手拭で、鬢や頬をぬぐいながら、案内をこい、到着を高畠五郎に知らせてほしい、とせっかちに頼んだ兵馬は、まだ衣服をぬぐっている虎三郎に、
「とうとうきたのう。長崎まで」
と、快活にいった。
「ほんまに、とうとうじゃのう」
虎三郎は、感慨ぶかげに、それでいて、喜びを押えきれぬ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

口ぶりでいった。

阿波のくに徳島の城下から三百余里――。海をこえ、山河をふみわけ、何人かの先輩留学生のたどったと同じ道を踏破してきたのである。

長崎の留学の先達には、シーボルトの高弟、美馬順三があり高良斎がいる。近くは、緒方洪庵塾の俊秀、高畠深斎（のちの耕斎）がいる。いずれも、阿波が誇ってもいい洋学の先駆者である。

深斎は、兵馬たちが、たよってきた高畠五郎の兄だ。その深斎を、たびたび招いて藩主、松平阿波守斉裕は、蘭書の講義をさせ、あるいは、海外事情を語らせた。奥小姓の、井上兵馬と沼田虎三郎は、おそばで陪席を許され、蘭学の初歩を学んだ。

深斎の影響もあって、藩主斉裕は、洋学を好む。巷間で、蘭癖大名――といわれているほどである。

藩主じきじきの秘命をおびて、兵馬は砲術、虎三郎は蘭式操練法の研究のため、高畠五郎の寄宿する光永寺に着いたのは、嘉永元年秋――、九月十三日である。ときに、五郎二十四歳、虎三郎二十一歳。兵馬は、十八歳であった。

「住職に、挨拶だけしておいてもらおうか、あとのことは、いっさい、話をつけてある」

と、高畠五郎は、廊下を先に立った。

長崎桶屋町、光永寺。住職を、正木羅雲といった。

阿蘭陀屋敷へ通学する書生たちを、この寺は、よく置いた。兵馬の、このときより六年ののち、豊前中津藩家老の若との、奥平十学が、蘭学修業にやってきて、福沢諭吉と一緒に寄宿したのも、この寺である。

後年、幕末の風雲が急をつげ、幕府と外国の間に、往復文書がしげくなったころ、外交文書の翻訳方として、高畠五郎と福沢諭吉は、机をならべて仕事をすることになる。福沢の著『福翁自伝』は、そのころのことを回顧し「親友、高畠五郎……」とかいている。光永寺では、今日いうすれちがいだったが、因縁はあったわけだ。

翌日、五郎は住職に、

「あの仁異相じゃな。とにかく、出世なさるだろう。世が世なら、一国一城のあるじとなる相をしてござる」

と、いう意味のことをいわれた。異相は、兵馬が、である。

「まさか」

と、五郎はいった。

一国一城のあるじは、どう考えても大げさな話だった。

「愚僧も、まさか、と思う。しかし、異相の持ち主であることには、まちがいない」

羅雲はいった。その後、同じことを羅雲は、口にすること

がなかったし、兵馬に話したら「あほうなことぬかして」と笑い飛ばしたので、五郎も忘れた。

しかし、星霜移って二十三年ののち、兵馬は、徳島県の大参事（知事）となる。明治四年のことである。また、市町村制実施の、明治二十三年には、初代徳島市長となっている。井上兵馬――、のちの井上高格（たかのり）である。一国一城のあるじとなったと、いえばいえる。

だが、これは、のちの話。

長崎では、高島秋帆の獄以来、公式に、砲術を教授する塾はない。

洋式砲術の研究が、禁止されたわけではないのだけれども、秋帆と同時に、かれの高弟の多くが、逮捕、禁獄の厄にあっているためである。

兵馬は、長崎奉行所の役人である山本物次郎に入門した。表むきは、蘭学修業――である。

山本物次郎は、長崎奉行所付き触頭（ふれがしら）。かつて、高島秋帆に学んだ俊秀だ。さいわい事件をまぬがれ、今は、ひとり蘭書をひもとき、あるいは、阿蘭陀（おらんだ）屋敷へ出むいて指導をうけ、砲学を勉強している。

兵馬は、山本物次郎に学ぶほか、虎三郎とともに、高島五郎から、オランダ語の手ほどきをうけ、阿蘭陀屋敷へも通う。加比丹や通詞から、異国の学問を学ぶのである。

とにかく、オランダ語をおぼえぬことには、砲術も、練兵法も、研究できない。日本語でかかれた、西洋兵学の書物は、まだ出版されていない時代である。書物に似たものといえば、先人が、蘭書から、自分流に翻訳した毛筆書きのものである。所持者をたずねて行って、それを写させてもらう。

ところがこれも、一番かんじんな兵器の名称や部品名、あるいは、調練法の号令その他が、原語のままである。適当な、術語の訳ができていない。

たとえば『高島砲術伝授書』『砲図』『砲台図』といった本がある。刊本となるのは、もうすこしのちだが、写本として、多少流布していた。術語は、ほとんど原語だ。当時としては、やむをえないことであったし、この風習は、オランダ語が、英語に変わりはするが、幕末から明治初年までつづく。

この『高島砲術伝授書』は、高島秋帆の高弟、晴海山本清太郎の手になる。晴海は、いち早く秋帆に入門し、秋帆門下の逸材といわれた。長崎で、儒学と砲学を教授し、門弟二百余に達した。が、秋帆の獄の際、旅行をいっさい禁じられ、兵馬たちが長崎に至ったころは、まだ謹慎中だった。

秋帆の留守宅には、かれの長男、晴城高島浅五郎がいた。父にしたがって、西洋火技をきわめ、漢学を山本晴海に学

んだ。

後年の、黒船来航後、父秋帆が、ゆるされて出獄し、江川太郎左衛門（英竜）らとともに、海防の任に当たることになった時代、晴城も、幕府に召されて江戸へ移り、講武所教授、大砲差図役となるのだが、このときは、山本晴海と同様謹慎中である。

野鶴大木藤十郎という西洋砲術家も、長崎にいた。荻野流の砲術家から転じ、秋帆とならび称せられた。秋帆と親しかったから、獄のとき、当然捕われる位置にいたが、眼疾があり、盲目同然だったため厄をまぬがれた。

こうした人たちを兵馬は、ひそかにたずねて、教えをきくことになる——。

が、それはともかく、砲術修業が、もっとも困難な時期に、兵馬は、長崎へきた。

あわただしく、十日ほどが過ぎた。

いくらか、町のようすが、わかってきた。

空が、ぬけるように青い。

徳島の空も、天が高く美しいが、長崎の空は、もっときれいで、澄んでいる。

（美しい町だ）

と兵馬は、おもった。珍しいものが、いたるところにある。

商品、風俗習慣、料理などに、いわゆる南蛮ふうがみられ、かすかに、異国のにおいがした。

日がたつにつれ、兵馬は、深斎から預かってきた二十両の金が、重荷になってきた。

それは、五郎の気持の負担にならぬていどに、三人の留学費としてくれ、という注文つきの金だった。夜の勉強用に、油をたくさん買いこんでみる。勉強家の五郎は、とてもよろこぶが、兵馬から恩恵をうけている、と感じる。そとでの飲食代を、兵馬が払う。五郎は、兵馬のおごりだ、とおもってしまう。

そして、長い留学だ、金は、大切につかわねばいけない、などと注意を与えるのである。兵馬を、浪費家だとおもっている。

こころ苦しくなって、ある夕方、二十両の秘密をぶちまけた。

「そうか……兄上が、なあ」

書写していた手を休めて、五郎は、腕ぐみした。

天保十三年、父深造が病没し、家業を継いだ兄の生活に、そう余裕はないはずだった。

「金は、これだ。まだ、ほとんど手をつけていない。学資にするなり、家郷へ送りかえすなり、好きなようにしてくれ」

ほとほと困りぬいた、という顔付きで、金を渡す兵馬に、

うむ、といって五郎も、むずかしい表情を示した。
二人のやりとりを、沼田虎三郎が、黙ってきいている。
「ありがたく、ちょうだいする。送りかえしては、兄の好意をふみにじることになろう」
五郎は、腕ぐみをといた。
買いたい蘭書を求める——と五郎は、二、三の書物の名をあげ、
「残りの金で、お二人を丸山へ案内する」
と、いった。
「それは、いけない。貴重な、意味の深い金だ。丸山なんぞで、消費する手はない」
反対する兵馬と、虎三郎に、
「実は、この、いま書写している書物、自分のために写しているのではない」
と五郎は、札金を目的に、写本をつくっていることを告白した。二冊やれば、丸山の遊女屋くらいならば、案内できる金をうることができるのだ、と。
「ともかく、一度、わしが招待する。黙って、ついてきてくれ」
五郎はいった。
なおも二人は固辞をつづけたが、主張は、だんだん弱くなる。
紅灯のちまたへの好奇心もあれば、あそびたい欲望もある。
何といっても、若い。
「善は、急ぐべし」
最初に、立ちあがったのは、兵馬だ。
丸山は、江戸の吉原、京の島原とともに、日本の三大遊里のひとつだ。
井原西鶴が、書いている。長崎に、
「丸山というところなくば、上方の金銀ぶじに帰宅すべし。爰通いの海上の気づかいのほか、何時知らぬ恋風おそろし……」と。
そこへ、行こうというのである。
丸山の入り口に、思案橋がある。
橋の名は、遊蕩すべきか、おもいとどまるべきかを、とつおいつ思案するところから出た。
その思案橋に、兵馬たちはかかった。
橋のたもとに、紅灯がゆれている。
三人は、ためらわない。
柳が植えられていて、紅灯の光りにゆれている。葉が、青青としている。徳島より、よほど暖かいのだ、と兵馬はおもう。空気が、ねっとりして柔らかい。
橋をわたると、長崎ふうの石だたみで、すこしのぼりにな

っている。すでに、弦歌さんざめく廓内である。
うわさにきいて、想像していたのより、はるかに壮大で、華麗である。まず、建て物が大きい。色彩がきらびやかで、飾りつけが美しい。照明も、あかるい、店構えに、何となく、異国ふうの情緒がただよっている。
(さすが、長崎の遊里だ)
内心、兵馬は、びっくりしている。
「高島秋帆先生が」
と、突然、兵馬が大きい声を出した。
「シーッ」
五郎が、あわてて制した。指を二本、唇へ当てている。廓内の敷き石道には、かなり人が行きかっている。秋帆の名は、往来で、しかも、こういうところでは、禁句だった。
「うん。わかった。わかった。ところで、その秋帆先生だがね、先生がよく登楼して、だらだら遊びをしたという、千秋亭や筑後屋は、どこだ。行ってみたいんだが……」
いくらか声を低めているが、田舎者だ、声が大きい。
だらだら遊びとは、流通(いっぱつ)のことだ。丸山で何日でも遊びつづけた秋帆の話は有名だ。だれかにきいたのだろう。
千秋亭は、丸山一流の料亭。筑後屋は、遊女屋である。評判は、五郎も知っているが、何しろ丸山は初めてである。苦学力行、爪に灯をともすような、貧乏生活のあけくれだ。あそぶ金も、暇もなかった。
いまさら、今夜が初めてだとは、いいだしかねて、五郎は困った。千秋亭も、筑後屋も、頼山陽が遊んだことで有名な引田屋も、どこにあるのか知らぬ。冷や汗をかくおもいだが、ままよ、と歩いている。
いろんな名前の店がある。
弦歌のさんざめきが、うえから降ってきた。二階でさわいでいるのだ。
「おや、あれは、いつかの男ではないか。たしか、植久とかいったな」
虎三郎が、立ち止まって柳のこずえを仰いだ。兵馬も足を止めた。
もの蔭からとび出してきた小柄な男が、道ばたの柳の老木に、するするっとのぼったのだ。長崎入りした日見た、女に殴られていた男と似ていた。
柳のうえで小男は、ドンチャンさわぎをしている二階をうかがっていたが、首をひねり、何か考えごとをするふうだった。
やがて、ひらりと二階の手すりに飛びつき、どこに手をかけたのか、背の倍はある高さの大屋根へ、いとも軽々と上がった。まるで、猿(ましら)のような身ごなしだった。
やみに、男の姿は溶けた。

「ほほう。見事じゃのう」
軽わざ師か、忍者のようなすばやさに、兵馬は感心してしまっている。
「ものとりかな」
「まさか。この時間に、夜盗でもあるまい」
「とはおもうが、けしからぬ振舞いではないか。この家へ立ち寄って、ひとこと教えてやろうか」
「よせ、よせ、くだらぬおせっかいは。第一、あのように敏捷なやつのことだ、教えてやっても、おそらくむだだろう」
まだ、屋根を見上げている虎三郎にいいすてて、兵馬は急ぎ足になった。だいぶ先で五郎が立ち止まり、どうしたのだ、といった表情で、こちらをむいている。
わずかの間に、遊客がどんどんふえている。
仲間と一緒に、ぞろぞろ歩くのがいるかとおもうと、足早に、坂道をのぼってゆく商家の若旦那ふうがいたり、すでに、酔っぱらっている千鳥足の老人がいたりした。
「筑後屋へ行きたいもんだ……」
と、兵馬はつぶやいた。
その筑後屋で、高島秋帆は、唐琴という遊女を愛した。本名をお香（阿香）といった。娼婦には珍しいほど教養があり、やさしい女だったという。のち秋帆に落籍されて、寵をほしいままにした。
秋帆の高島家には、代々正妻をいれぬ、という奇妙な家憲があった。
高島家は、長崎のまちの年寄をつとめる家筋で、ひじょうに富裕だった。その暮らしは、十万石の大名より豪奢――、といわれた。七代目が、愛妾をたくわえたので、妻が嘆き悲しみ、長崎近郊の、滝の観音の淵で投身自殺をした。以来、正妻をいれると必ずたたりがあるというので、正妻を娶らぬことになった、と。
家憲の由来は伝説めいている。
家が裕福で、若くて、覇気のあった秋帆は、正妻を娶らぬという家憲をたてに、足を公然と遊里へむけた。豪快に放蕩したのである。讒にあって、秋帆は江戸へ送られ、愛妾お香は、長崎にとどめられた。
そのお香、毎晩、寝床をとらず、帯を畳のうえへひろげて眠り、獄中の秋帆をしのびつづけている――と、市中の評判である。
漫然と歩いていたら、千秋亭があった。
五郎は、ずいっと入った。
なにしろ、ふところに大金がある。
玄関の板敷きに、きらびやかな服装の女たちが、八の字にいならんで、三つ指ついて迎えた。仲居や女中だが、一様に美人に見えた。灯火が、まひるのようにあかるい。みがきこ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.